



GA Afternoon Colloquiumシリーズについて

大学院総合理工学府・環境エネルギー工学専攻・教授 副プログラムコーディネーター
谷本 潤

*Sleep after toil,
Port after stormy seas,
Peace after war,
Death after life does greatly please.*

労苦のあとの眠り、時化のあとの港、
戦いのあとの平和、生のあとの死は大いなる喜び。

ご存じEdmund Spenser(1552-99)の“The Faerie Queene”
「神仙女王」の一節である。これは、彼がエリザベスI世の治世下、アイルランドにおける反イングランド暴動をつぶさに見てもしたから、のっけからタイトルと何の関係があるのかとの読者の訝りは一面尤もである。——否、関係大ありなのである。主専門、周辺専門、環境学を構成するインフラストラクチャとしての人文学、社会学、プラクティカルスクールに英語特訓、海外研修に留学とまさしく勉強でんこもりのGreen Asiaである。Omnipotent——全知全能の知的エリートたるには、noblesse oblige(高貴な者には義務がある)と謂った構えなり

エートスが必須になるけれど、全力疾走で42.195kmは走破できない(が、最後に挽回するさ、と出だしからテレンコしては記録など出ないことも真なりと言っておこう)。道草が必要である。道草する馬をけしからんというのはダメで道草が馬を育てるのである(しつこいが、それは正則の訓練あってはじめて真なる命題たり得ることを確認しておこう)。

そもそもは、勉強の埋め草に気の張らないハナシをしようじゃないかというのが、GA Afternoon Colloquium(以下、コロキウム)の発端であった。人文学、社会学のコースワークは如上のようにおさおさ怠りなく仕掛けられているので、もっとソフトな語り、語りと言って障りがあるなら、聞く側との双方向の対話が出来ないかと思ったわけだ。幸いにして本プロジェクトには九大の各局部から理工学以外の幅広い碩学に参加頂いているから、このプログラム担当の先生に、金曜の午後の一刻、お茶でも飲みながら、ご自身専門の広く周縁にわたる話題を提供頂こうじゃないかとのことになった。学生だけでなく、由来、理工学のごく狭い専門分野に自閉気味のわたしたちも勉強の機会にあずかるうとの魂胆もある。





果たして、何をやるんだそれはとの反問が上がった。御尤もである。じゃあ私が最初にやってみようと言うことになってしまった。建築物理学、都市気候学、人間・環境・社会システム学に統計物理学と風呂敷枚数は多いがいずれもモノになっているとは言い難いシガナイー学徒ながら、主専門の恋愛小説だけは自信がある。それじゃ、言霊、言葉、言語について話しましょう、と言うことでキックオフと相成った。題して、「なぜ英語を学ばねばならないか——Lingua franca(リングア・フランカ)とローカル言語」。

当方、先鋒でもあり、言い出し兵衛でもあり、相当に勢い込んでおりました。いい機会であるから、諸君たちは何故、並の五六倍は勉強せねばならないのか、勉強の出力はどうして英語という向こう側のプロトコルで発しなければならぬのか、日本および日本人とは何ものぞ、もって、諸兄ら、宜敷く知的エリートたれ、と熱情をもって語ってやれと思っただけではよかったが、反応はどうであったろう。

これは司馬遼太郎がどっかに書いていた挿話かと思う。韋軒・秋月梯次郎が第五高等学校(熊本大学の前身)の教授だった頃、漢文の講義で下調べをしてこなかった学生に一言だけ「足下はなに藩

か」といったそうな。明治二十年にもなって何藩かもないのだが、要は、郷党の期待を担ってエリート養成機関である旧制高等学校に学ぶ者にはそれなりの構えがあって然るべきだとの諷教である。蓋し、言われた学生も雷(いかずち)に拍たれた如く頓悟しただろう。明治の学生と現下の彼らを比べても詮方ないけれど、エリートはエリートであって欲しいと願って已まない。

この企画は、不定期に行い、授業ではない。交通費も出ない。場所は、筑紫であったり、伊都、箱崎の場合もあろう。話者の先生に合わせねばなるまい。一応、最後まで静かに聴いていた(ように見えた)聴衆の中から一人の学生がやおら手を上げた。「あの～次回から、衛星授業でやってくれませんか。ここまで来るの大変なんで・・・」以上、当方の厚き熱情カラ回りの顛末である。

あだしごとはさておき、話題提供をして下さる向きにはGAセンターの渡辺貴史先生まで連絡を。

(watanabe.takashi.280@m.kyushu-u.ac.jp)

